

『純粹理性批判』の反実在論的解釈

——その内実と意義——

千葉 清史

『純粹理性批判』の超越論的觀念論は、マイケル・ダメットが彼の反実在論を定式化した、真理論的道具立てによって、より明快かつ意義深い仕方で解釈される。これが私の主張である。この基本路線に従って『純粹理性批判』全体を再解釈するというプログラムを私は『純粹理性批判』の反実在論的解釈^(一)（あるいは単に「反実在論的解釈」）と呼ぶ。私は千葉⁽²⁰⁰⁴⁾において、その一つの着手点を示した。

こうした解釈方針はそれ自体決して新しい試みであるわけではない。それはすでに一九八〇年代初頭にバトナム、そしてダメット本人によって示唆されていたし、またその

着想を具体的に展開した研究も存在する^(三)。

しかしそれら先行研究は次の二点において不十分であった。一、それらは、反実在論的解釈に対する反論に十分に応答し得るものではなかった。それは一つには、彼らの反実在論的解釈の枠組みが批判に耐えられるほどの適切な定式を欠いていたことにより、もう一つには、超越論的觀念論が反実在論でなければならぬ、という必然性を、カントが具体的に提示した議論に照らして十分に説得的なものとして示すことができなかつたことによる。それらの多くは、単にいくつかの引用や『純粹理性批判』の基本的なテーゼのダメットの反実在論との連関を指摘するだけで満足

してしまっている。^(四) 二・それらはまた、『純粹理性批判』を反実在論として解釈することの意義を十分に示すことができなかった。ダメットの反実在論といった新しい道具立てを古典解釈に持ち込む以上、それらを導入することで何かの意義深い知見が得られたり、今まで見過ごされてきたような新たな問題が拓かれたりするのでなければならぬはずであろう。

結局のところ、それらの先行研究は、反実在論的解釈に對する次のような典型的な否定的反応に応答できなかったのだ。一方で、反実在論的解釈はカント解釈として間違っている、と考える人たちがいる。また一方で、超越論的觀念論がダメットのな反実在論であることは、「反実在論」とは何かということを知ってさえいれば、当たり前すぎて、取り立てて論じるに値するようなことではない、と考える人たちがいる。反実在論的解釈は、このような反応の兩者に對して適切な仕方では応答できるのでなければならぬだろう。

論述を始めるにあたってぜひとも強調しておきたいことがある。『純粹理性批判』の反実在論的解釈の眼目は、カ

ントの思索とダメットのそれとの間に類同性があることを指摘することではない。ただそのようなことだけであるならば、それは古典解釈としてはさほどの意味もあるまい。反実在論的解釈の意義はむしろ、現代の分析的道具立てを用いて、『純粹理性批判』の内在的問題に新たな光を当て、ということのうちにある。この点において、反実在論的解釈における私の意図はさしあたり積義的なものである。

本論考で目指されることは、『純粹理性批判』の反実在論的解釈の基本的枠組みと、その解釈枠組みのカント研究に對する意義を明瞭ならしめることである。反実在論的解釈の必然性を、『純粹理性批判』の個々の議論に密着して示すことはここでは目指されない。^(五)

本論考は以下の順で進行する。第一節では、実在論／反実在論のダメットによる定式の内実と、その定式化を導く理論上の動機が、そのカント研究への応用に必要な限りにおいて素描される。第二節では、『純粹理性批判』の反実在論的解釈の枠組みが提示される。最後に、第三節で、反実在論的解釈によって新たに拓かれる問題圏の描出を通じ

て、反实在論的解釈のカント解釈における意義が示される。

一 ダメットの反实在論とは何か

さまざまな理論領域（ダメットはこれを「係争クラス」と呼ぶ）において、实在論とそのまま対立者（それらを総称して「反实在論」と呼ぶ）との論争が見出される。ダメットが好んで挙げる例は、物的实在についての实在論と観念論（例えば現象主義）との対立、数学における实在論（プラトニズム）と構成主義（例えば直観主義）との対立、いわゆる「デカルト主義」と行動主義の対立、過去の实在についての实在論／反实在論の対立等である。これらの対立が共有する構造を明らかにすることがダメットの实在論／反实在論定式の目的である。

ダメットの定式の特質は以下の二点にまとめられる。

一、方法論的側面…伝統的には、实在論論争においては、係争クラス存在者の存在論的身分にもつばら焦点が当てられていた。例えば、外的实在は独立に实在するものなのか

それとも我々の諸観念の束に過ぎないのか、あるいは、数学的对象は独立に实在する抽象的对象であるのか（プラトニズム）それとも人間精神の創造物であるのか（ブラウアー的直観主義）、といった具合である。それに対しダメットは、实在論／反实在論の対立を、係争クラス命題に適用される真理概念の相違として性格づける。

二、内容的側面…具体的には、实在論論争の対立の一般的構造は、係争クラス命題に適用される真理概念が認識超越的であるか否かをめぐるものとして性格づけられる。

議論の都合上、まず後者の内容的側面から論じることにする。实在論は、次のような真理概念（「認識超越的真理概念」と呼ぶことにする）を提唱するものとして性格づけられる。《係争クラス命題の真理値は、その命題が検証可能であるか否かということから独立に確定している》。反实在論は、そのような真理概念を否定し、係争クラスのある命題が特定の真理値をとる、ということのうちに、その命題の検証（あるいは反証）という認識的契機が何らかの仕方に関わっているとする。このような真理概念を、さしあたり本論考では「検証主義的真理概念」と呼ぶことにしよう。

う。以下、その一例として次の定式を用いて考察を進めることにする。《係争クラス命題が真（あるいは偽）であるのは、その命題が検証（あるいは反証）され得る場合、またその場合に限る》。ただし、「検証され得る」という語の解釈可能性が複数存在するため、この定式においても、検証主義的真理概念の具体的な内実が確定しているわけではない。むしろ、検証主義的真理概念の具体的なヴァージョンを確定することこそ反実在論的理論にとつての重要な課題の一つとなる（第三節参照）。

真理概念の相違として性格づけられることによつて、実在論／反実在論の対立は、演繹的推論の規範の問題、特に、二値原理：『いかなる命題も真か偽かに確定している』⁽⁴⁾の採用如何の問題に密接な関わりを持つことになる。ダメットはしばしば、二値原理の採用如何が実在論と反実在論を区別する決定的な点である、とすることがあるが、多くの論者が指摘するように、これには確かに問題がある。というのも、（先段落で性格づけられたような意味における）実在論でありつつ二値原理を拒否する立場が存在し、また、反実在論でありつつ二値原理を維持する立場も不可能では

ないからである。前者の一例は、指示対象を持たない単称名辞を含む言明（例えば、「現在のフランス王は禿である」）は真でも偽でもない、とするストローソンの「前提の理論」である。後者の可能性を理解することは、とりわけカント解釈への応用にとつて重要な意味があるので、若干詳細に叙述することしよう。

反実在論の検証主義的真理概念によれば、二値原理の採用とは、《係争クラスの》いかなる命題も検証され得るかあるいは反証され得るかのみならず、《いかなる命題も検証され得るかを受け入れることに等しい。しかし、このようなことを前提することは一般にはできない（検証も反証もされないような命題があるかもしれないからである）》。検証主義的真理概念の採用から二値原理の否定が即座に帰結するように見えるのはこの理由からである。しかし、何らかの仕方では、係争クラス命題のいずれもが検証あるいは反証され得ることを示すことができさえすれば、反実在論と二値原理は両立可能であることになる。例えば次のような仕方において——一、それに属する命題のいずれもが検証あるいは反証可能であるような係争クラスを注意深く確定することによ

つて（例えば、有理数内での算術命題のうちで量化を含まないものを係争クラスに限定すれば、その係争クラスにおいては、検証主義的真理概念を採用した場合でも、二値原理が維持される）。あるいは、二、特定の係争クラス言明に、《その係争クラスのあらゆる命題は検証可能かあるいは反証可能である》といった強い認識論的原理が妥当することを発見することによって。あるいは、三、二値原理が妥当するような仕方で《検証／反証され得る》の意味を規定することによって（例えば、《認識の理想的極限においてならば検証／反証され得る》という仕方で）。

従って、反实在論は二値原理と必ずしも両立不可能なわけではない。しかし注意されなければならないのは、そのためには、上述のような特殊な方策——係争クラスを制限する、あるいは強力な認識論的原理を証明する、あるいは二値原理が可能となるような《検証／反証可能性》の特殊な意味を確定する——が必要だ、ということである。従って、少なくとも次のように述べることができると、反实在論が採用されれば、二値原理の妥当性は、反实在論に特有な仕方での問題的なものとなる。この意味で、真理概念による

实在論／反实在論対立の定式は、二値原理の採用如何の問題に直結しはしないにせよ、その問題と密接な連関を持つことになる。また、二値原理が反实在論的な仕方で（すなわち検証主義的真理概念の採用と、その上で二値原理を維持するための特殊な前提が与えられない、という仕方で）拒否されるならば、フレーゲ以来の標準的述語であるいわゆる古典論理で認められる論理法則のいくつか、例えば排中律や二重否定除去則は、一般的には認められず、直観主義論理のような非古典論理が採用されなければならない。实在論／反实在論の対立はこうして、論理学の問題と密接な関係を持つことになる。

次に方法論的問題に移ろう。实在論論争は係争クラスの存在者の存在に関わるものでもある、ということをやダメットはむしろ進んで認める。このような問題をダメットは「形而上学の問題」と呼ぶことにしよう。ダメットが主張することは、彼の真理論的な問題設定は、形而上学の問題を効果的に問い直すための道具立てだ、ということである。ここで二つの問題が生ずる。一つは、实在論論争への真理概念への導入が一見すると唐突だということであ

る。實在の問題と真理概念の問題にいったいどのような関係があるのだろうか。もう一つは、問題設定の変革の意義である。両者の間になんらかの関係が見出されるとして、いったい新しい問題設定をあえて促す理論的意義は何であるのか。これらを順に論じていくことにしよう。

實在論論争において問われるべき形而上学の問題と、真理は認識超越的か否かという真理論の問題との連関は、次のいわゆる「同値テーゼ」⁽¹⁾によって打ち立てられる…《任意の命題 p について、「p」が真であるのは p とときまたそのときに限る》。p という事態が、認識され得ることから独立の存立をもつならば、命題 p は認識から独立に真であり、逆もまた同様である。係争クラス命題の真理概念が認識超越的であるか否かは、係争クラス対象の存立が認識超越的であるか否かに対応する。

しかしこのような相即関係ならば、まったく当たり前すぎるようにも見える。このような自明な書き換えが、いったいどのような利益をもたらすというのだろうか。

真理論的問題設定の意義は、真理概念に密接に関連する論理学の問題に注意を喚起することで、實在論と反實在論

の対立点を、演繹的推論において受け入れられる規範の相違（たとえば二値原理の採用如何、そして、それが拒否される場合にはその特別の理由）という仕方では明瞭ならしめる、ということにある⁽²⁾。係争クラス存在者は主観依存的か否か、とそれだけ問うたところで、その相違がどのような仕方で具体的に現れるのかは必ずしも明らかではない（現象主義ですら、外的対象の存在について實在論的常識に相当程度歩み寄ることができるので）。それに比べ、演繹的推論における規範の相違は、それが論理体系の相違を帰結する、という点において、明瞭な内容を持つ。ダメットのな定式によって、實在論／反實在論の対立は、単なる趣味や世界観の問題で済まされないような、具体的な争点を新たに見出したのである。

實在論論争の真理論的定式化というダメットの着想には、もう一つの意義がある。それは、非還元主義的な反實在論の可能性を拓く、ということである⁽³⁾。實在論論争はしばしば、係争クラスが他クラスに還元可能か、という点をめぐって争われてきた。その典型的な例は前世紀前半の實在論と現象主義との論争である（後者は、外的対象に關す

る命題がセンスデータに関する命題群に還元可能である、と主張し、前者はそれを否定する。こうした対立図式は、還元可能性を否定することがすなわち一般に実在論を擁護することに異なるかのような見かけを誘発した。しかし、ダメットの定式では、係争クラス命題の真理性が検証依存でありさえすれば、それがさらに還元主義でもあるか否かということは、反实在論の本質に属するものではない。この点は、本論文では論じることができないが、『純粹理性批判』における経験的現実の存在論を非還元主義的なものとして解釈する可能性を拓く、という点において、カント解釈への適用に際して重要な意義を持つことになる。

二 『純粹理性批判』の

反实在論的解釈とは何か

反实在論的解釈は、超越論的実在論と超越論的観念論との対立の本質を、時間・空間的現実についての命題（以下これを「経験的命題」と呼ぶことにする）に関する真理概

念の認識超越性如何をめぐる対立と捉え、その上で、『純粹理性批判』の採用する（あるいは採用すべき）検証主義的真理概念の具体的なあり方を確定することを指すものである。

ここでまず注意されるべき点が二点ある。一つは、検証主義的真理概念が適用されるべき係争クラスは、さしあたりは経験的命題のみだということである。反实在論的解釈においても物自体の問題は確かに取り扱われなければならないが、それは物自体についての命題に関して反实在論を主張することとは異なる。

もう一つは、超越論的観念論には二つの区別されるべき要素——カント自身はこれらを明示的に区別しているわけではないのだが——があり、反实在論的解釈が第一義的に依拠するのはその一方だということである。超越論的観念論の要素の一つは、『経験の対象は表象である』といった定式によって表現される、個々の現実的出来事の主観依存性の主張であり（以下これを「対象の観念性テーゼ」と呼ぶ）、もう一つは、『時間・空間は我々の感性のア・プリオリな形式である』という主張である（以下これを「形式の観

念性テーゼ」と呼ぶ)。この区別については本節後半で再論されるが、さしあたり、反实在論的解釈が焦点を当てるのは前者の対象の観念性テーゼである。

詳細な論証は別稿に譲り、ここでは、対象の観念性テーゼが経験的命題に関する反实在論を含蓄する、ということ直感的にわかりやすい仕方ですすことを試みよう。

「時空的現実表象である」といつた表現は、——表象とその対象の区別、というカントの観点を導入すれば——「時空的現実是我々に表象される限りのものである」——また、「実際に表象される」ということにとどまらない、可能的表象／「可能的経験」ということを考慮に入れれば——「時空的現実は我々に表象され得る限りのものである」と言い換えられよう。しかし、表象され得るもの全てが現実的であるわけではもちろんない。その中で、さらに現実的なものとして表象され得るものと、そうでないものとの間に違いがあつて然るべきであり、また——経験的認識の可能性を否定するのではない限り——両者は認識において我々によって区別され得るものでもない。しかしその違いは、表象の志向的对象に対応するであらう

認識超越的実在者（すなわち物自体）の有無によって説明されるわけにはいかない。というのも、もしそうであるとすれば、物自体の認識不可能性のゆえに、志向的对象に対応すべき物自体の有無も判定不可能であり、そしてこれから即座に経験的認識一般の不可能性が帰結することになつてしまふからである。現実／非現実の違いは、認識超越的実在者との対応／非対応ということではなく、あくまでも認識連関内で決定される限りでの違いでなければならぬ。このことを「現象界の自律性」と呼ぶことにしよう。^(四)

現象界の自律性が認められるならば、経験的認識における現実／非現実の区別のための基準という、一般には認識論的要件に過ぎないものが、存在論的役割をも果たすことになる。時空的領域に関しては、経験的認識の基準に従つて現実的であると認められ得るものが、そしてそののみが、現実的である。これは、先の同値テーゼより、次に等しい。経験的命題が真であるのは、それが経験的認識の基準に従つて真と判定され得る（＝検証され得る）場合、そしてその場合に限る。これは検証主義的真理概念に他ならない。

（論証終）

さて、先に対象の観念性テーゼと形式の観念性テーゼの区別が指摘された。この区別の根拠は次の二点による。第一に、両者は内容的に区別可能であり、第二に、カントはそれらに異なつた議論を与えている。

まずは第一の論点から見てみよう。一、対象の観念性テーゼ、すなわち検証主義的真理概念を拒否しつつ、形式の観念性は保持する理論も、また、二、検証主義的真理概念を採りつつ形式の観念性を拒否する理論も可能である。一の例は例えば次のようなものである。《我々が空間的／時間的あり方として表象することがらは、現実のそれ自体のあり方に帰属するようなものではなく、現実それ自体が我々の感性の主観的制約に従つて現象するあり方に過ぎない（形式の観念性テーゼ）。しかし、我々が認識する個別対象の現象的あり方と、物自体の非空間的／時間的あり方との間には対応関係がある。換言すれば、現象的对象に関する命題は、その現象的对象に対応する物自体が存在しないならば、真ではない》^{二五}。二、の例としては、形式の観念性テーゼに共感を持たない反实在論一般が該当する。

次に第二の論点であるが、超越論的観念論の正当化論証

としてカントが提示している個々の諸議論に注目すると、次のことがわかる。カントの個々の議論はさしあたり、どちらかを証明する構成になつてゐる。例えば、第一版第四パラロギスムス論における、《超越論的实在論は経験的観念論に陥るが、それに対し超越論的観念論は経験的实在論であり得る》ということを示す議論、そしてアンチノミー論における超越論的観念論の間接証明の議論において、（対象の観念性テーゼから区別される意味での）形式の観念性テーゼはまったく用いられていない。それらの議論の論証力は、空間・時間が我々の感性のア・プリオリな形式であるかということに無関係なのである。それに対して、「超越論的感性論」の議論ははつきりと形式の観念性テーゼに向けられており、それは必ずしも対象の観念性テーゼをも同時に証明するものではない（少なくともそうした解釈が可能である）。

私は、『純粹理性批判』におけるカントの個々の議論を、それが何をどのように論証するものであるかという観点から、きめ細かく区別することの重要性を強調したい。先段落において指摘されたような事情がある以上、対象の観念

性テーゼと形式の対象性テーゼはまず区別されてしかるべきであり、^(二六)その上で、その間の関連（あるいはカントがそれらをとりにたてて区別しなかったことの原因）が説明されるべきである。

上で示されたような区別は、注意深いカント研究者には既に知られていたことではある。しかし、その際、形式の観念性テーゼさえ確保されれば、対象の観念性テーゼは「観念論的残滓」に過ぎないとして軽視される傾向があった。^(二七)

それは、現代における観念論的思索の人気の無さに由来するばかりでなく、観念論的思索を体系的に整理・展開するための道具立てが欠けていたという要因も大きいと思われる。反実在論に関するダメットの考察は、こうした状況に变化をもたらした。反実在論的解釈は、カントの観念論的思索を真面目にとり、ダメットの考察の成果を活かしつつ、対象の観念性テーゼのうちにそれ自体で考察・展開されるに値する思想を見出さんとするものである。

三 反実在論的解釈の

カント解釈における意義

反実在論的解釈は、超越論的実在論に対する超越論的観念論の相違の本質を、前節前半部で言及された「現象界の自律性」のうちに見出す（そしてこれは、結局のところ、検証主義的真理概念の、『認識超越的真理概念の否定』という要素に等しい）。しかし現象界の自律性とは、認識超越的実在、すなわち物自体は存在しない、という主張でもなければ、物自体は現象界のあり方にかなる関わりもたない、という主張でもない。現象界の自律性にとって重要なのは、経験的認識が真であるためには認識超越的事実との対応は必要ではなく、従って後者は前者の意味の一部をなさない、ということのみである。^(二八)そしてこのことの強調が、反実在論的解釈を従来の解釈から区別する点である。

しかし現象界の自律性ということであれば、とりわけ新しい主張でもないと思われるかもしれない。しかしそうではない。先に現象界の自律性と呼ばれたようなことは多くの場合曖昧なままにされることが多く、また、それを明示

的に肯定しているように見える解釈者^(九)ですら、現象界の自律性からの帰結を十分に見通し得たわけではなかった。

第一節でダメットの反実在論の内容的側面に関して述べたように、ある係争クラス命題に対する検証主義的真理概念の適用は、係争クラス命題に関する二値原理の自明視の拒否（さらにその帰結として、排中律や二重否定除去側の妥当性の問題視）を伴う。二値原理の自明視の拒否とは、単に分析哲学のみに特有で、「カント哲学」にとっては「外在的」で無視できるような問題であるわけではない。それは、《認識されるか否かはさておき》いかなる事態も存立しているか存立していないかのいずれかとして確定している《という、現実についての我々の（常識的な）理解の根幹を問題視する、ということなのである。従来の解釈は、たとえ「現象界の自律性」のようなものを認めているかのように語っていたにせよ、こうした帰結が存在すること、カントの超越論的観念論が、常識的な現実性理解を根本から変革することについて、十分に自覚的ではなかった。

その原因は、実のところカント自身のうちにもある。というのも、カントその人もまた、その点に関して十分に自

覚的ではなかったからだ。事実、カントが次のような確信を持っていたことは疑いようもない。たとえ「経験の対象は表象に過ぎない」と（超越論的文脈において）言われたとしても、ことさらに超越論的文脈に踏み込まない以上、日常的、個別科学的命題は相変わらず額面どおり受け入れられ得るし、またそうされるべきである。排中律の妥当性の自明視^(一〇)もこのうちに含まれよう。現在の「常識実在論者」が主張するように^(一一)、我々の常識的な見解は実在論的である。従って、私はこうした確信を「実在論的確信」と呼ぶことにしたい。さてしかし、超越論的観念論は本当に——カントが主張するように——実在論的確信と両立し得るのだろうか？

両立しない、ということを実在論的解釈は示す。そして、まさにこの両立不可能性から、次の問いに答えることが超越論的観念論解釈にとって不可避な課題となる。超越論的観念論が実在論的確信と完全には相容れないならば、前者は後者とどの点において、どの程度異なることになるのか？ 超越論的観念論（とりわけその対象の観念性^{デーゼ}）は、我々の常識的な実在論的確信と異なるどのような

現実像を提起するものであるのか？

この課題に際して注意されるべきことがある。一般に、反实在論的理論が提示する現実像が我々の实在論的確信から逸脱する度合いが大きければ大きいほど（すなわちそれが「直感に反する」帰結を多くもてばもつほど）、その理論は——そのことによつて決定的に論駁される、というわけではないにせよ——説得力を失う。カントの超越論的観念論は従つて、それが提示する現実像が实在論的確信／常識的現実像から大幅に逸脱せざるを得ないならば、そのことゆゑに頓挫する可能性もあるわけである。それゆゑに——カントが实在論的確信を奉じているという単に文献上の事情にのみよるのではなく——超越論的観念論が提起する現実像の具体的なヴァージョンは、实在論的確信とは完全には両立しないにせよ、そのなるべく多くの、そして重要な要素を保持し得るようなものとして確定されるべきである。

さて、超越論的観念論が提示する現実像の具体的なヴァージョンは、超越論的観念論が（経験的命題に関して）採用すべき検証主義的真理概念の具体的なヴァージョンを規

定することを通じて確定される。超越論的観念論の検証主義的真理概念は、第二節において、暫定的に次のように定式化された²：「経験的命題が真であるのは、それが検証され得る場合、そしてその場合に限る³」。しかし、この暫定的な定式が語るのは、真理の認識超越性の否定という消極的な規定と、何らかの特定の意味で「検証され得る」命題の範囲と真なる命題の範囲が一致する、ということだけである。ここで、このような消極的性格付けを超えてさらに、

「検証され得る」ということで具体的に何が意味されるべきなのか、「検証可能性」ということでどれほどの広い範囲が意味されるべきなのか、ということが画定されなければならぬ。例えば、いつ、誰によつての検証可能性なのか。私が現時点に持っている実際上の認識能力が私が死ぬまでの間に運用しつづけて得られる検証の総体に属するもののみが「検証可能」である、とされるならば、それは狭すぎるだろう。それでは、他方の極端をとり、およそ可能な全てのデータを持ち、推論は絶対に正確でまたその為の時間も問題にならないといった（実現不可能な）理想的状況であるならば得られるであろうような諸検証の総体こそ

が、「検証可能性」で意味されるべきことなのだろうか。^(三三)こうした問題が、カントが諸著作において提示している諸議論との整合性に照らして解決されなければならない。こうして検証主義的真理概念のカント的ヴァージョンにおいて真とみなされる領域が画定されれば、さらに同値テーゼの適用により、超越論的観念論が提起する現実像が明らかにされることになる。

従来解釈においては、そもそも超越論的観念論と実在論的確信との両立不可能性が明確にされなかったため、超越論的観念論が提起する現実像を確定するという課題の切迫性が隠蔽されていた。反实在論的解釈の意義は、件の両立不可能性を強調することを通じて、この課題をその必然性においてはっきりと提示することである。そしてさらに、カントの超越論的観念論による時空的現実像のあり方を分析するために、現在までに数学の領域で比較的良く整備されている直観主義論理を手引きに用いることも可能になる。論理的分析の手段は、単に術学的で内容空疎なテクニクなのではない。それは、単に抽象的／直感的なイメージを所有するにとどまらずに、超越論的観念論からの具体

的帰結を体系的に明らかにするために有用な道具立てなのだ。^(三四)

超越論的観念論による時空的現実像を明瞭ならしめること——これはそれ自体すでにカント研究として重要な課題であろうが——だけでなく、反实在論的解釈は、さらにカント理論哲学体系の根幹に関わる問題圏を拓く。その中で私は特に、反实在論的解釈が、カントの総合／超越論的主観の理論に——とりわけそれらの時間性に関して——問い直しを迫る、ということに注意を喚起したい。

認識されることがらに関する時間は確かに我々の認識／検証に依存적であるかもしれない。しかし——まず常識的に、認識主観が認識主観として時間のうちに存在すると仮定すれば——、認識主観がそこで認識を行なうところの時間、すなわち、そこにおいて主観に直観の多様が与えられ、またその多様をもとに総合をおこなうことで主観が認識を生み出すところの時間は、認識依存적ではないように思われる。というのも、そのような時間に基づいて、認識されることがらに関する時間（対象的時間関係）が構成されるはずだからである。しかしこれは時間一般を認識依存的な

ものとするカント的現実在論に反する。そうすると、きわめて直感に反する次のような帰結が導かれるように見える。…認識依存的な時間の他に、認識依存的でない時間を認めることもできず、さりとて与件の受容や綜合作用そのものは認識依存的ではない（むしろ認識こそそれらに依存している！）のだから、与件の受容も、その綜合作用も、そして認識をおこなう主観も、時間のうちに存在するようなものではあり得ない。要するに、時間的現実を構成する主観は無時間的でなければならぬように思われるのである。

以上の議論をカント哲学は受け入れざるを得ないのであるか、すなわち、『純粹理性批判』の綜合の理論は、『多様の無時間的受容に基づく、無時間的主観の無時間的綜合による時間的現実の構成』といった理論的魅力に乏しい極端なテーゼを立てなければならないのであろうか。^(四)それとも、受容性や綜合、認識主観の時間性を認めつつも、時間的現実の認識依存性を保持することが可能なのだろうか。

この問題への取り組みは本論の課題を大幅に超える。しかしこうした問題が問題として確保されるためにも、時間

的現実の認識依存性ということがごまかしのない形で明瞭にされておかなければならないのだ。いつでも容易な逃げ道を用意できるような解釈図式は、カント哲学への批判者をやり過ごす目的には有用かもしれないが、哲学的にも、そして積義的解釈としても有意義なものではあり得ないだろう。

以上で素描された『純粹理性批判』の現実在論的解釈は、さしあたり、カント理論哲学を解釈するという積義的意図に導かれたものである。しかし、本論考を閉じるにあたって、カント理論哲学を——ダメットの反実在論という方向性とその分析道具を用いて——精査／明晰化する、という積義的意図を導く哲学的動機について触れておくのも無駄ではないかと思う。『純粹理性批判』の反実在論的解釈を通じて最終的に目指されるのは、カント哲学の精査を通じて、「観念論的」と漠然と呼ばれ得るような理論体系の、一つの説得的なヴァージョンを再構成する、ということである。この目的のためにとりわけカント哲学に当たることが有意義であるのは、彼の思索の体系性による。カント哲学の体系性は、哲学における様々な主題／問題圏相互の連

関、それらの位置関係についての見取り図を与える（カント哲学において、知覚、科学的認識、自我、自由意志、道徳、そして美学等々の諸問題がいかに緊密な連関のもとで提示されているかを想起されたい）。我々はカントが提示している個々の議論に補填を加え、あるいは改訂し、最終的には彼の提示した見取り図そのものを改変するかもしれない。しかしながらそのことによって、カント哲学の意義が低められるわけではない。私はむしろ、カント哲学の意義を、彼の体系的思索が、「観念論」的哲学構築の試みの一つの有力な着手点を我々に与え、我々のさらなる思索を促す、ということのうちに見たいと思う。『純粹理性批判』の反实在論的解釈の眼目は、来たるべき観念論的思索の展開に備え、カント哲学から多くを学ぶ得るために、カントその人が展開した思索の内実と、問い質されるべきその本質的な問題点を明瞭ならしめることの中にこそある。

註

* カントの著作からの引用は慣例に従い、『純粹理性批判』に関しては第一版と第二版の頁数を、それ以外は、著作名を示した後、アカデミー版の巻数とその頁数を示した。

(一) Putnam (1981) ch.3, Dummett (1981), p.471f.

(二) 『純粹理性批判』の反实在論的解釈の先行研究として最も体系的に整備されているのは Carl Posy の一連の研究である。Posy (1981), (1983), (1984a), (1984b), (1986), (1991)。そのほかの例としては Stevenson (1983), Walker (1983), Rogerson (1993), (1996) がある。

(三) 例えば Clark (1985), Blatnik (1994), Wytler (1997), Van Cleve (1999), ch.13, Hanna (2000), Abela (2001) がある。

(四) 注二において挙げられた Posy のものを除くすべての先行研究にそれが当てはまる。

(五) この課題は、『純粹理性批判』アンチノミー論並びに第一版第四パラロギスム論の解釈によって果たされる。前者については Posy (1983)、後者については千葉 (2004) を参照されたい。

(六) この限定により、第一節の論述は、ダメットの实在論論争への寄与に関して本来重要であるところの以下の二点に触れていない：一、实在論論争と意味の理論 (Theory of Meaning) との関係、二、ダメットの、反实在論的意味の理論を擁護する議論。現代版实在論論争に対するダメットの寄与に関してのバランスのとれた解説としては Hale (1997) がある。

(七) 二値原理については注意されるべき点を二点指摘しておきたい。一、二値原理は、『命題の採り得る真理値は真か偽の二種類しかない』といった、真理値の数に関する規定ではない。二値原理を否定

したからといって、真と偽以外の第三の真理値（例えば、『真でも偽でもない』が導入されなければならない、というわけではない。例えば、直観主義論理の標準的意味論では、二値原理は否定されるものの、命題のとり得る真理値は依然として二種類（すなわち、『真』か『偽』）のみである。それは、直観主義論理が、『いかなる命題も真か偽のいずれかである』を拒否しつつも、『いかなる命題についてもそれが真でも偽でもない』ということはない）を承認するからである。（この点を理解することは、直観主義論理ならびにダメットの反実在論の理解のためにきわめて重要なではあるが、その解説をここで行うことはできない。この点についての明晰かつ詳細な解説としては、Tennant (1997) の第七章を参照されたい。）

二、排中律は論理法則であり、意味論的原理である二値原理とは本来区別されるべきである。その理由は、後者は前者を含蓄するのに対し、逆は一般には成り立たないことのうちに見出される（van Fraassen (1968) の超厳格評価 (superevaluation) を用いた意味論がその一例である）。この点は、本論考で提示される限りの内容に特別な影響を及ぼすものではないが、ダメットの道具立てを用いて超越論的観念論の内実の精査を具体的に遂行する際には十分な注意を持って取り扱われなければならない論点となる。

(八) これらの方策の適用例を挙げよう（ただし、これらの想定可能な方策が、実際にも適切であるかについての立場決定を私はここで行わない。そのためには独立の論考を要する）。一、まず、方策一を用い、時空の現実についての命題のうち、『純粹理性のアンチノミー』を生じさせるようなものを排除したものを係争クラスとして定める。このことは例えば、係争クラスを、時空の現実についての命題で無限領域への量化を行わないもの、すなわち、個別的事実を表す高々有限個数の命題の連言あるいは選言によって表現可能であるような命題に制限することによって実現されるだろう。次に、『純粹理

性批判』の「第二類推」における現象界の決定論のようなテーゼの妥当性をともかくも承認する。現象界の決定論は、『いかなる個別的事実も、我々が現在所有しているデータをもとに、因果関係を遡源してゆくことにおいて原理的には認識され得る』という認識論的な帰結を持つ。これを方策二として用いる。このことによって、時空の現実についての命題一般に検証主義的真理概念が適用されたとしても、先に限定された係争クラスに関しては、二値原理が維持されることになる。二、方策三を用いれば、係争クラスの恣意的な限定や、（現象界の決定論のような）法外な認識論的原理の妥当性を前提することができなく、認識超越的真理概念を拒否しつつ二値原理を維持することができる。それは実際バトナムが彼の「内在的實在論」によって行おうとしたことである（Putnam (1981) 第三章）。ただし、この方策の成否は、「認識の理想的極限」ということに実質的かつ擁護可能な内実を与えることができるのかということにかかっている（一）の問題に関する「内在的實在論」批判としては例えば Wright (1992) の第二章を参照）。

(九) この名称はダメットによる。Dunnnett (1978), "Preface", p. xx.

(一〇) 詳しくは Dunnnett (1991), pp.10-15 及び (1978), "Preface", pp.xxv-xxix を参照されたい。

(一一) この点は Dunnnett (1963) においてとりわけ強調されている。

(一二) 以下の註(一八)を参照されたい。

(一三) 代表的な例は、『純粹理性批判』において「超越論的観念論」という名称の定義が明示的に与えられた二箇所 (A490f/B518f と A369) である。またこうした定式はすでに「超越論的感性論」にも見出される。「我々が外的対象と名づけるものは、その形式が空間である」ところの我々の感性の単なる表象に他ならなく」(A30/B45)。

(一四) 論証全体の中で、とりわけ「現象界の自律性」を導くこの部分論証は、確かに決定的なものではない。完全な論証の提示は別稿にゆだねなければならない。「現象界の自律性」という語は用いられていないものの、このテーゼに関するより詳細な論証としては、千葉(2004)ととりわけ第三節を参照されたい。

(一五) 例えば Adickes (1929), S.47: 「触発する物自体と触発される自我自体との間の」関係が触発と称されるのは、その関係が、自我それ自体と物自体のかの純粹に内的で非空間的・非時間的秩序を時間的・空間的關係において模写する限りにおいてである」(一)内の補足は筆者による。また、こうした解釈は今日においても見られる。例えば、対象の現象的あり方はその智習的あり方にスパーヴィーヴンする、とする Langton (1998), Van Cleve (1999) の解釈がそれである。

(一六) カントが自らの超越論的観念論を「形式的観念論」「批判的観念論」と呼び換えることで形式的観念性テーゼ(と私が上で名づけたこと)の重要性を強調した(例えば、B519Am, *Prolegomena*, B.IV, S.293f, S.375, *Kants Brief an J. S. Beck am 4. Dec. 1792*, B.XI, S.395)と「こと」は、形式的観念性テーゼと対象の観念性テーゼの区別とその両者の関係の問題に際して確かに考慮されるべきことではあるが、超越論的観念論が対象の観念性テーゼを含む、という主張の反論にはならない。というのも、(本論考で論証することではできないが)この主張の解釈上の決定的な証拠は『純粹理性批判』アンチノミー論における超越論的観念論の間接証明の議論のうちに見出され、またこの議論は、『純粹理性批判』第二版において削除も変更もされていない、ということによる。『純粹理性批判』アンチノミー論をカントが第二版において書き換えたことはカントにそのための時間も余力も余りなかったという理由からに過ぎない、というような解釈に私は賛同できない。というのも、例えば、一七九八

年九月二二日付カントのガルヴェ宛書簡(Bd.XII, S.257f.)に見られるように、カントはその後年においてもアンチノミー論の『純粹理性批判』における重要性を疑っていないように思われるからである。

(一七) 例えば、久保(1983), Guyer(1987)。

(一八) しかしそうすると、現象界と物自体との関連が新たに問い直されなければならないことになる。反实在論的解釈は、現象と物自体との関係の問題において問われるべき(しかし従来必ずしも明瞭に意識されては来なかった)本質的論点を明瞭にする。その論点とは次のものである。一方で、現象界の自律性から、認識超越的事実(私はその実在を否定しない)との対応ということが経験的命題の真理の意味にいかなる関わりももたないにもかかわらず、他方で個々の認識において認識超越的事実には認識主観に影響を与える例えれば受容性の事実」ということは、どのように理解されるべきであるのか。

また、この問題は、経験的認識における受容性の事実が反实在論的枠組みのうちでどのように説明され得るのか、という、カント解釈の枠内にとどまらない、反实在論的理論一般が避けて通れない問題でもある。奇妙なことに、現在の反实在論擁護の文献はこの問題を等閑視しているように思われる。この点に関して、カント研究は、触発の問題を巡る議論についての伝統的な蓄積を利用しつつ、現代の理論に見られるこうした欠落を埋め、反实在論の説得的なモデルの作成に寄与する可能性を蔵している。

(一九) 例えば Pruss (1974) は、経験の対象を現象として見る、ということとは、その対象をそれが釈定(*endeten*)され得る限りにおいて現実的なものとみなすことに他ならない、と主張しつつも、それが二値原理の否定や排中律の問題視に通じることに気付いていない。

(二〇) カントが排中律の妥当性を自明視していたということは、

カントが実際に排中律を認めており、またそのために特別の議論が必要であるとみなしていなかったことからわかる。例えば次を参照されたい：Logik (Hrsg. von Jäsche) Bd.IX, S.53, S.116f., S.130.

(二二) 例えは Devitt (1991), Willaschek (2003).

(二二) 例えは Putnam (1981) の「内在的実在論」のように。「内在的実在論」をカント解釈に適用する際の問題としては、先の註(八)で指摘されたような理論的な問題の他に、そのような立場が『純粹理性批判』においてカントが提示している議論と整合するか(すなわちカント解釈として可能か)という問題もある。私は、Putnam の「内在的実在論」は『純粹理性批判』のアンチノミー論と整合させることはできなく、と考えているが、この問題の検討には独立の論考を必要とする。

(二三) もちろん直観主義論理の導入が全ての問題を解決するわけではない。それを経験的命題に適用する際の問題点はよく知られている。それは、経験的認識においては、数学的証明に相当するような、一度検証されればその結果は覆されない、というほどの決定的な検証は不可能である、ということである。従って、数学的証明概念に依拠して整備されている直観主義論理をそのままの形で経験的命題に適用することは出来ない。この問題の解決案のうち重要なものは「超」は、Wright (1992) による *superassertibility* の理論(並びに Tennant (1997) による(検証条件ではなく)反証条件に注目する意味論の試みが挙げられる)。

(二四) そのように主張する解釈者は現に存在する。例えば Rosas (1991)。

参考文献

- Adickes, Erich (1929): *Kants Lehre von der doppelten Affektion unseres Ich als Schlüssel zu seiner Erkenntnistheorie*, J. C. Mohr.
- Abela, Paul (2002): *Kant's Empirical Realism*, Oxford University Press.
- Blatnik, Edward (1994): "Kant's Refutation of Anti-Realism", in *Journal of Philosophical Research* 19.
- Clark, A. J. (1985): "Why Kant couldn't be an Anti-Realist", in *Analysis* 45.
- 千葉清史 (2004): 『純粹理性批判』第一版第四ノラロギスムス論における検証主義的真理概念(日本カント協会(編): 『日本カント研究』カント学責任論』理想社、二〇〇四年)所収。
- Devitt, Michael (1991): *Realism and Truth*, 2nd Edition, Princeton University Press.
- Dummett, Michael (1963): "Realism" in Dummett (1978).
- (1978): *Truth and Other Enigmas*, Harvard University Press.
- (1981): *The Interpretation of Frege's Philosophy*, Harvard University Press.
- (1991): *The Logical Basis of Metaphysics*, Harvard University Press.
- Guyer, Paul (1987): *Kant and the Claims of Knowledge*, Cambridge University Press.
- Hale, Bob (1997): "Realism and its Oppositions", in Hale, Bob/Wright, Crispin (eds.): *A Companion to the Philosophy of Language*, Blackwell, 1997.

- Hanna, Robert (2000): "Kant, Truth and Human Nature", in *British Journal for the History of Philosophy*, 8.
- 久保元彦 (1983): 「内的経験 (三)」久保元彦:『カント研究』創文社、一九八七年 所収。
- Langton, Rae (1998): *Kantian Humility*, Oxford University Press.
- Posy, Carl (1981): "The Language of Appearances and Things in Themselves", in *Synthese*, 47.
- (1983): "Dancing to the Antinomy", in *American Philosophical Quarterly*, 20.
- (1984a): "Transcendental Idealism and Causality", in Harper, William A/ Meerbote, Ralf (eds.): *Kant on Causality, Freedom, and Objectivity*, The University of Minnesota Press, 1984.
- (1984b): "Kant's Mathematical Realism", in *Monist*, 67.
- (1986): "Where Have All the Objects Gone?", in Robinson, Hoke (ed.): *Spindel Conference 1986: The B-Deduction, The Southern Journal of Philosophy*, 25, Supplement, 1986.
- (1991): "Kant and Conceptual Semantics: A Sketch", in *Topoi*, 10.
- Prauss, Gerold (1974): *Kant und das Problem der Dinge an sich*, Bouvier.
- Putnam, Hilary (1981): *Reason, Truth and History*, Cambridge University Press.
- Rosas, Alejandro (1991): *Transzendentaler Idealismus und Widerlegung der Skepsis bei Kant*, Königshausen und Neumann.
- Rogerson, Kenneth (1993): "Kantian Ontology" in *Kant-Studien*
- 84.
- (1996): "Kant and Anti-Realism", in *Southwest Philosophy Review*, 12.
- Stevenson, Leslie (1983): "Empirical Realism and Transcendental Anti-Realism I", in *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supplementary, 57.
- Tennant, Neil (1997): *The Taming of the True*, Oxford University Press.
- van Fraassen, Bas (1968): "Presupposition, Implication, and Self-reference", in Lambert, Karel (ed.): *Philosophical Applications of Free Logic*, Oxford University Press, 1991.
- Van Cleve, James (1999): *Problems from Kant*, Oxford University Press.
- Walker, Ralph C. S. (1983): "Empirical Realism and Transcendental Anti-Realism II", in *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supplementary, 57.
- Willaschek, Marcus (2003): *Der mentale Zugang zur Welt, Klostermann*.
- Wright, Crispin (1992): *Truth and Objectivity*, Harvard University Press.
- Wyller, Truls (1997): "Kausalität und singuläre Referenz: Eine sprachphilosophische Rekonstruktion des empirischen Realismus bei Kant", in *Kant-Studien*, 88.

Anti-realistische Interpretation der *Kritik der reinen Vernunft*

— Deren Gehalt und Bedeutsamkeit —

Kiyoshi CHIBA

Meine These ist folgende: Der transzendente Idealismus in der *Kritik der reinen Vernunft* ist anhand der wahrheitstheoretischen Überlegungen nach Michel Dummett in klarerer und bedeutsamer Weise zu interpretieren. Ich bezeichne die Interpretation in dieser Richtung als die „anti-realistische Interpretation“ der *Kritik der reinen Vernunft*. Das Ziel dieses Aufsatzes ist, den Grundrahmen einer anti-realistischen Interpretation zu entwerfen und die Bedeutsamkeit derselben für die Kant-Interpretation zu verdeutlichen.

Im ersten Abschnitt stelle ich die dummettsche Formulierung des Realismus und des Anti-Realismus und sein Motiv für diese Formulierung dar.

Im zweiten Abschnitt beschreibe ich den Rahmen der anti-realistischen Interpretation der *Kritik der reinen Vernunft*. Es gibt zwei Implikationen hinsichtlich des „transzendentalen Idealismus“. Die eine ist die These, dass der Raum und die Zeit als Formen der Sinnlichkeit a priori zur Subjektivität gehören. Die andere wird beispielsweise in Kants Formulierung wie „empirische Gegenstände sind nichts anderes als Vorstellungen“ ausgedrückt, und sie besagt, dass nicht nur die Formen, sondern auch die Existenz einzelner empirischer Gegenstände in irgendeinem Sinne vom Erkenntnissubjekt abhängen. Die anti-realistische Interpretation richtet sich in erster Linie auf die letztere Implikation des transzendentalen Idealismus und stellt folgende Hauptthese auf: Das Wesen des Gegensatzes zwischen dem transzendentalen Realismus und dem transzendentalen Idealismus muss als Unterschied bezüglich des Wahrheitsbegriffs verstanden werden, der auf Propositionen über die raumzeitliche Wirklichkeit angewandt werden soll.

Die Bedeutsamkeit der anti-realistischen Interpretation wird im dritten Abschnitt erörtert. Die Hauptabsicht derselben ist nicht, auf die Ähnlichkeit zwischen der dummettschen Fragestellung und der kantischen hinzuweisen. Sie ist vielmehr, die traditionellen Probleme, wie dasjenige über das Verhältnis zwischen der phänomenalen und der noumenalen Wirklichkeit, mit der neuen Methode der Analyse besser behandeln zu können und auch eine neue Problematik zu öffnen, die Kants Philosophie innewohnt, auch wenn sie in der Kant-Forschung nicht genug berücksichtigt worden ist.